OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中世イラン語と古代チュルク語―マニ教文献中の奥書2種―
Author(s)	吉田, 豊
Citation	内陸アジア言語の研究. 1993, 8, p. 127-133
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/20654
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中世イラン語と古代チュルク語
——マニ教文献中の奥書2種——

吉田　豊

ここでは，マニ教文献にみられる2種類の奥書を紹介する．同じ内容のことを一方は古代チュルク語とソグド語，他方は古代チュルク語と中世ペルシア語で書いたものである．これらは，それ自体としては零細なものだが，最近注目されている中世イラン語，特にソグド語と古代チュルク語との二言語併用を考える上で重要な資料となると期待され，敢えてノートの形で発表する次第である．なお古代チュルク語とソグド語の二言語併用については，N. Sims-Williams and Hamilton, J., *Documents turco-sogdiens du IX^{e}-X^{e} siècle de Touen-houang*, London, 1990, pp. 9-12 参照．

（A）

W. B. Henning は，ドイツのトルファン探検隊の将来品中のマニ教ソグド語の説話を集めて校訂した際，ひとつの文書の裏に奇妙な書き込みがあることに気が付いた (cf. Henning, *BSOAS* 11, 1945, p. 482)．彼のテキストと訳は次のとおりである．

'yny pwstk 14 βγ(?) xypδ xcy ky L' pyr't pr'ys[t] s'r pδsn

"This book has 14 bundles(?). He who does not believe it, can go to...".

その後 N. Sims-Williams は，A. Stein が敦煌から将来した漢文仏典（薬師経）の末尾に類似のソグド語の落書きがあることに気付いた (cf. Sims-Williams, *IIJ* 18, 1976, p. 66)．彼のテキストと1行目の訳は次のとおりである．

1　'yn'k pwst'k pw'y xypδ ZK ky ZY L' pyr'kt (for *pyr't)

ZK

2 'yw xry kyr kwn t(y)s

"This book belongs to Pw'y. He who does not believe (this)...".

第2行目は，kyr「男性性器」，kwn「肛門」及びtys「入れ！」から判断して，一種の罵り言葉であったと考えられるが，このような口語表現の正確な意味は不明であるとする．彼はまた，Henningがpr'ys[t]と補った点について，本来命令形pr'ys「至れ！」であった可能性も高いとしている．正しい判断であろう．

最近W. Sundermannは，同じくマニ教ソグド語の説話を校訂し，そこに下記のような落書き或は奥書があることを報告している (cf. Sundermann (ed.), *Ein manichäisch-soghdisches Parabelbuch*, Berlin, 1985, p. 34).

c6 'yn'k pwsty 'z-w t't'γwr y(w)[γtym]

c7 ky L' pyr't βr't wxšy ('γδ)['kw kw]

c8 'wk'prmyš y'mcwr wrγtm'x t't'γw[r]

c9 s'r psy sw't t't'γwr

"Dieses Buch [habe] ich, Tataγur, ge[lernt(?)]. Wer es nicht glaubt, der bringe Wort (?) <und> Wunsch [zu] Ugäb(i)rmiš, Yamčur, Wirγdmāx(?) und Tataγu[r], er gehe (?) fragen den Tataγur".

彼の訳からも知られるとおり，この部分の解釈は非常に難しい．いくつかの読みの可能性があり，将来テキスト・翻訳ともに改善されることになるであろう．例えば，wxšyと読まれた語はwγšyと読んで，「嬉しい」或は「喜び」と訳すこともできる．しかし残念ながら，当面筆者には説得力のある交代案を提出することができない．ただし，Sundermannは気付いていないが，これが上に引用した2つの落書きと非常に良く似ていることは明らかであろう．どちらも「この本は，誰々のものである（或は誰々が学習した）」で始まり，「（そのことを）信じないものは・・・せよ」で終わっている．

筆者は，1992年秋三菱財団人文科学研究助成金の支給を受け，3週間ベルリンに滞在し，ドイツ・トルファン探検隊の将来品を調査することができた．その際，上記のものと非常によく似た，古代チュルク語の書き込みがあることに

気付いた．それはマニ教ソグド語文書（Ch / So 20002；未出版）の裏面に見いだされる．ここには，多くの落書きがソグド語と古代チュルク語で書かれている．これらの落書きは，書く方向も一定しておらず，首尾一貫した内容を伝えようとしたものとは考えられない．しかも，文書の体裁から判断して，各行の約半分は破損している．文字が明確な部分は次のように読むことができた．

ソグド語

1 [ ]t wyδβ'γ 'z-w

2 [ ]m'xβy-rt ywγty-m

「・・・説明を私・・・Māxβīrt が（？）学習した．」

古代チュルク語

1 txy kym kyrtkwns'r [ ]

（2行目以降はやや離れた所に書かれている）

2 pw pytyk myn x[ ]

3 'yšw pwšxwštym kym [ ]

4 pry m'xprn x'

5 txy kym kyrtkwnm's'r [ ]

6 txy kym kyrtkwns'r [ ]

7 txy kym kyrtkwns'r [ ]

8 txy kym kyrtkwns'r [ ]

9 txy kym kyrtkwns'r [ ]

「そして信じる者は・・・この本は私・・・'yšw が学習した．[信じない]者は・・・愛すべき m'xprn に・・・また信じない者は・・・また信じる者は・・・また信じるものは・・・また信じる者は・・・また信じる者は・・・」

pwšxwštym は難解だが，ソグド語の ywγtym「私は学習した」から考えて，同じ意味の古代チュルク語の表現であったと考えられる（bošγun-「学習する」参照）．なお pry は，ソグド語形と考えた．

もう一点，現在旧西ベルリンの国立図書館が保管するマニ教ソグド語文書19520，19521，19522（これらは互いに接合する）の裏の漢文面に下記のような落書きがある．筆者はこれらを，同図書館から漢文の比定を委嘱された龍谷大学の西域研究会において，寄贈された写真から研究した．今は確認できないが，これらの断片は明らかに前述のCh / So 20002と同一の文書に属するだけでなく，互いに接合し直接先行する部分と考えられる．つまり下記のテキストは，本来上記の古代チュルク語の第1行の直前に置かれるべきものである．（なお，別にこの部分にはソグド語の落書きも存在するが，それらは手紙の書き出しの書式の練習であり，ここでは扱わない．）

1 pw pytyk myn [ ]
2 kym kyrtkwnm's'r p[ ]
3 txy kym kyrtkwnm's(')[r]
4 txy kym kyrtkwnm's'r [ ]
5 txy kym kyrtkwns'r [ ]
6 txy kym kyrtkwns'r [ ]

「この本は，私・・・信じない者は・・・また信じない者は・・・また信じない者は・・・また信じる者は・・・また信じる者は・・・．」

上で扱ったソグド語と古代チュルク語の落書きが，全く同一の内容であることは明らかであろう．これらはおそらく同じ文化的背景の中で，同じことを，ある場合にはソグド語で，また別の場合には古代チュルク語で書いたものであるに違いない．その年代は，敦煌の蔵経洞出土の文書が含まれていることと，ソグド語と古代チュルク語の二言語併用が10世紀頃の現象と考えられること，さらには西ウイグル国のマニ教が，10世紀をもってその盛期を終えたこと（森安孝夫『ウイグル＝マニ教史の研究』，大阪，1991，127-173頁参照）から判断して10世紀頃とみなしてよいであろう．

最後に敦煌出土のソグド語仏典Or. 8212 / 85 (一般にDhyāna-textと呼ばれる．このテキストについては，吉田豊「ソグド語仏典解説」，『内陸アジア言語

の研究』VII 1991 (1992) p. 109参照) の裏面の2行の古代チュルク語の落書きについて言及しておきたい．この2行はそれぞれ短冊状の別紙に書かれ，貼り付けてあるらしい．両者は同筆であるが，互いの間隔および関係は明らかではない．現在までにP. Zieme と森安孝夫による2種類の解読が提案されている．

(a) 1 bo bitig ärsär il körmiš-ning bitig ärür kim

2 mn kiz čun altm amru tapnïr-mn ïnča

"As for this scripture, it is the scripture of Il Körmiš which I, Kiz Čun (name of Chinese origin ?), have received." (cf. Zieme, *apud* Sundermann, *BSOAS* 40, 1977, p. 635)

(b) 1 män gižčün altïm amru tapïnur män ïnča

2 bu bitig ärsär il körmiš-ning bitig ärür YY ?

「私は義全 (経) を入手した．永く崇拝する．かくの如くこの経典は国家鎮護の経典である．」(森安孝夫「ウイグル語文献」『講座敦煌 6 敦煌胡語文献』，東京，1985，29-30頁参照)

森安はこの経典の裏面にもう一箇所漢文の落書きがあり，そこに「此経是義全経阿骨密看読不徳也」とあることから，kyz-cwn を義全に対応するものと考えた．

現在のところ筆者にはどちらが正しいか決定することはできない．しかしZieme の第1行が，上で扱った落書きとよく似ていることは注目される．第2行が直接これに後続するという証拠がないなら，kim "which / who" の後にkirtgünmäsär「信じないならば」を補うことができるのではないだろうか．

(B)

トルファン出土の中世ペルシア語で書かれたマニ教文書 (M 98 I 及び M 99 I) の上部の，通常見出しをつける場所には，次のような書き込みがある：

M 98 I recto: 'w mn yyšw'przy[nd]

M 98 I verso: dby(r) 'y nwg 'wd 'q(r)wg

M 99 I recto: kym nbyšt pd pryḫ

M 99 I verso: (')w h(r)wqyn rnzwr'n

これは，Henningが正しく認識したように，本文の内容を示す見出しではなく，写本の筆記者による請願である．彼はこの部分を次の様に翻訳している（cf. Henning, *OLZ* 1933, Nr. 12, p. 751）．

"... mir, Yišō'frazend, dem neuen und (noch) ungeübten Schreiber, der ich schrieb in Liebe zu allen Mühebeladenen..."

なお，彼が(')wと読んだ語を，初めF. W. K. Müllerは'dと読んでいた．しかし'dでは意味が通じないことから，この読みを疑い，'wと訂正した（Müller, Handschriften-Reste in Estrangelo-Schrift aus Turfan, Chinesisch-Turkistan, II, *APAW*, Berlin, 1904, p. 42参照）．最近出版された文書の写真によれば，やはりMüllerの読みは正しい（cf. M. Hutter, *Manis kosmogonische Šābuhragān-Texte*, Wiesbaden, 1992, Tafel IV）．もちろん，'dでは相変わらず意味は通じないので，Henningの読みは写本に対する訂正とみなすべきである．Hutterがこの点に一切言及しないのは，不可解である．

この請願文ときわめてよく似た内容の一文が，古代チュルク語のマニ教文献（T II D 171 裏面左欄17-22）の奥書の中に見いだされる（cf. A. von Le Coq, Türkische Manichaica aus Chotscho I, *APAW* 1911, p. 28）．

ymä yigädmäk utmaq bolzun manga aγduq qarï bitkäči-i o m(a)r išoy(a)zd maxistak üzä o kim ymä uluγ amranmaqï-n aγïr küsüšün bitidim

「私，下手で年老いた筆記者，長老職のMar Ishoyazdに優れたることと勝利がありますように．その私は偉大な愛と大きな願いをもって（これを）書いた．」

この古代チュルク語の奥書から，上で引用した中世ペルシア語の最初の'w mnの前にはymä yigädmäk utmaq bolzunに似た内容の文があったことが推定される．またaγduq yangï bitkäči「下手で新米の筆記者」を含む類似の請願文が，マニ教文書の見出しをつける場所に書かれた例も知られている（cf. Le Coq, *op. cit.*,

pp. 21-22). さらに,「私, 下手な筆記者・・・」で始まる奥書は, 比較的に古い古代チュルク語文献に何度か現れる. それらについては, 拙稿「新疆維吾爾自治区新出ソグド語資料」『内陸アジア言語の研究』VI, 1990, 61頁参照.

中央アジアのマニ教徒は, 概ねソグド人か古代チュルク語を話すウイグル人であったと考えられるので, 上の中世ペルシア語の請願文もソグド人かウイグル人によって書かれたものであろう. それ故将来, 類似の内容を持つソグド語の奥書が発見される可能性は高い. また, 比較的に古いタイプの古代チュルク語文献に見られるこの種の奥書が, 本来マニ教文献で用いられたものであったということも, 十分に考えられる. もしそれが正しければ, マニ教文献に普通の書式が, 後に一部の仏典にも使われたことになり, ウイグル人は初めマニ教徒であったものが, 後に仏教に改宗したのだとする, 最近の森安の説(『史学雑誌』98 / 4, 1989, 1-35頁参照)を補強することになるだろう.

(本稿は, 文部省科学研究費一般C及び三菱財団人文科学研究助成金による研究成果の一部である.)